

2018年度第1四半期決算 <主な質疑応答>

開催日 : 2018年8月3日(ネットカンファレンス)

出席者 : 取締役専務執行役員 CFO 高畑 恒一

理事 主計部長 菅井 博之

理事 インベスターリレーションズ部長 田村 達郎

第1四半期実績及び通期見通しについて

米国の金利上昇の影響について、どのように見ているのか。

ドル調達コストはやや増加してきているが、現時点で米国経済の減速ではなく、当社の米国事業も堅調に推移していることから、特段大きな懸念はない。

第1四半期の当期利益(914億円)は、通期計画(3,200億円)に対して29%と高進捗であったが、通期見通しの上振れ確度や、今後の下振れ要素などがあれば教えてほしい。

全体として通期計画に対して順調に推移しているが、足元の一部資源価格の下落の影響や、米国の通商政策が中国やその他地域へ波及する可能性などについて注視する必要がある、通期計画に対する上振れ確度を見極めるにはまだ早い。第2四半期にはある程度状況が見通せるようになるので、その時点で変更があれば見通しを修正する。

非資源分野について、通期計画に対して第1四半期好調だった事業を教えてほしい。

鋼管事業に加え、輸送機・建機事業部門は建機やリース事業が堅調に推移している。インフラ事業部門も順調に工事が進捗しており、四半期毎で多少上下はするが、通期では計画通り推移すると見ている。不動産も一定の入替によるバリュー実現を前提とした事業であり、売却のタイミング次第だが、こちらも概ね計画通り。全体として、非資源事業は通期計画に対して概ね計画通りの進捗となっている。

第1四半期は運転資金の増加により営業キャッシュフローがマイナスとなったが、通期では改善していくのか。

運転資金増加の背景として、鋼管の需要増加に伴う在庫増加の影響があるが、在庫の回転日数は落ちていない。また、貴金属のトレーディングビジネスにおいて、毎年期初に在庫を積み上げて期末にかけて販売していくため、一時的に運転資金が増加していることも要因。通期ではマネージできる水準であり、現状計画に対して特段懸念はない。当社は創出したキャッシュの範囲内での投資を基本方針としており、引き続きしっかりキャッシュをコントロールしていく。

中計の成長戦略である「次世代新規ビジネスの創出」について、足元の状況を教えてください。
大型の投資が積み上がっているわけではないが、炭素繊維による 3D プリントや、AI による生産効率改善など、新規ビジネスに繋がるような投資を各分野で実行している。また、こういった新技術の活用による既存ビジネスの効率化・競争力強化の検討も進めており、全社的にデジタルトランスフォーメーションの推進を進めている。

個別事業について

鋼管事業の増益要因と、今後の見通しを教えてください。

米国のリグカウント数は前年同期比で 100 基程度増加しており、こうしたファンダメンタルズの回復を主因とする鋼管需要増に伴い鋼管価格が 2 割程度上昇したことも寄与した。今後については、OPEC の減産解除等により足元の原油価格上昇は一服しているものの、堅調な推移を見込んでいる。ただし、各種通商問題には注視が必要。

輸送機・建機事業部門で、前年同期比の各ビジネスラインの状況を教えてください。

各事業分野のトレンドは昨年から大きく変わっていない。建機は、地域毎に若干差はあるものの、全体としては引き続き堅調で想定通りに進捗している。リース、ファイナンス系の事業も同様に堅調。一方、自動車流通事業は、主戦場の中東を中心に引き続き苦戦。TBC 再編関連の一過性の為替損失を除くと全体としては昨年同様のトレンドで推移している。

TBC の足元の状況と今後の見通しを教えてください。

第 1 四半期実績は当社持分 50%ベースで▲3 億円となった。再編関連で発生した一過性の為替損失(約▲10 億円)は親会社で連結修正にて計上しており、個社業績には含まれていない。事業の状況については、ミシュラン側との卸売事業の統合による販路拡大やコスト削減、小売事業におけるリストラなど、統合においてやるべきことを粛々と進めている。

青果事業 (Fyffes、Sumifru Singapore) の足元の状況と今後の見通しを教えてください。

Fyffes、Sumifru Singapore とともに、昨年はバナナ市場が供給過多となり、価格下落に苦戦したが、当第 1 四半期は中南米の天候不順による需給タイト化に伴い市況が回復した。Sumifru Singapore は主力市場である日本での売上も伸びた。2 社ともに前年同期比で増益、通期見通しに対しても順調な進捗となった。

マダガスカルニッケル事業の操業状況について、足元の状況と今後の見通しを教えてください。

全体としては計画通りに進んでいる。操業制約となっていた硫酸プラントの一つは 5~6 月に修繕を行い、徐々に立ち上がってきている。4~6 月のニッケル生産量ベースでの操業率は 64%で、今後 8~9 月にもう一つの硫酸プラントも修繕し操業率 80%を目指す。安定生産には未だ課題があり、年間生産量は予算比で若干下振れる可能性もあるが、一方で市況は予算より高く推移しており、全体としては概ね予算通りの着地となると考えている。

第1四半期のチリ銅・モリブデン事業の状況を教えてください。

現在鉱石処理量はフルキャパシティの日量110千トン程度の水準であり、過去に課題となっていたモリブデンの実収率も想定程度となり、安定操業となっている。但し、現状のままでは十分な収益は得られないので、CAPEXを投下して鉱石処理量や生産量を増やすプランのFeasibility Studyを現在行っている。

ボリビア銀・亜鉛・鉛事業が第1四半期好調だが、その背景を教えてください。

売買契約条件の変更により、従来に比べ収益が先行して計上されたことによるもの。生産は通期計画通りの進捗となっている。通期見通しについて、現時点で見直しは行っていないが、足元の市況の下落も踏まえると期初計画通りの着地を見込んでいる。

第1四半期で実施したペルーYanacocha金・銅鉱山、米国タイトオイルへの新規投資は、久々の資源上流案件への投資になるが、投資決定の背景や意義など教えてください。

資源上流については、まずは仕掛案件の早期収益化に注力するが、中長期を見据えた取り組みも同時に進めている。ペルーのYanacochaは、既存の生産権益ではなく、将来の拡張計画への参加権を目的として出資したもの。今後の開発についてはFeasibility Studyを実施し、収益性を見極めた上で決定していく。また、米国タイトオイルについても、小さい投資でオペレーターシップのノウハウを獲得すべく参画したもの。当社として米国のシェールガス事業にすぐに大きな投資を実行することは想定していないが、シェールガスは米国におけるオイル・ガスの供給源として一定のウェイトを占めると考えており、将来の展開を考える為にも、まずはノウハウの獲得を目的に投資した。

以上